野地潤家先生編

「作文・綴り方教育史資料」（上・下）

激動する時代にあって、未来を正しく見通すことは、すべての人に切実に求められているところである。作文教育とて、その例外ではない。

未来の作文教育への展望を描こうとするとき、だれしも考えることは、今日の作文教育の現実とそこにひそむ発展可能性を、これまでの作文教育の歩みに照らして明らかにしたいということである。しかしながら、このしごとは、言うべくしてなかなか困難なことでもある。

本書は、この困難な課題に対して、一つの基礎的な資料を提供しようとしたものである。

本書は、大略次のように構成されている。

作文・綴り文教育史研究概況

Ⅰ　明治前期の作文教育

1　明治初期の作文書の類

2　「小学校校則綱領」

3　明治前期作文教授論

4　明治前期の作文ならびに指導案例

Ⅱ　明治後期の作文・綴り方教育

1　自由発表主義作文教授の提唱とその反響

2　明治後期綴り方教授の実際

Ⅲ　大正期の綴り方教授

——随意選題論を中心に——

1　芦田恵之助の綴り方教授論

2　随意選題論の展開

Ⅳ　大正期から昭和期へ

——雑誌「赤い鳥」綴り方を中心に——

1　雑誌「赤い鳥」の創刊と鈴木三重吉の綴り方教育理論

2　「児童自由詩」の発生と展開

3　「赤い鳥」綴り方作品

4　「赤い鳥」綴り方についての評価

（以上、上巻）

Ⅴ　昭和期——生活綴り方運動

1　生活綴り方の出発点

2　生活綴り方教育論

3　調べる綴り方

4　生活綴り方の指導計画

5　生活綴り方の文集活動
6　生活綴り方の作品
Ⅵ　昭和前期――国民学校時代の綴り方教育
Ⅶ　昭和後期――戦後の作文教育
1　経験学習と作文
2　生活綴り方運動の復興と展開
3　「書くこと」の指導
4　七〇年代の作文教育への展望
年表

（以上・下巻）

本書は、もとより資料集であって、作文教育史研究の記述ではない。しかし、そこにおのずと編者の史観があらわれていることもいなめない。なにしろ、明治以降百年にわたる作文教育の資料はぼう大なものであり、そのなかからわずかな資料を選び出すとなると、そこに一定の評価がはいらざるをえないからである。

とは言え、その評価基準は、その時代をできるだけ代表する資料ということにおかれていて、特定の立場のものだけというようにはなっていない。それゆえ、読者はある程度その時代の矛盾、対立を、あるがままにとらえることもできるであろう。そしてまた、そのことを通して、作文教育の歩みを、「歴史」としてとらえることも可能になろう。

作文教育は、時代・社会と深いつながりのある領域でもある。その意味では、作文教育の歴史は、時代・社会との連関でとらえられなければならない。各時期ごとに、その点にふれた概観がつけられているのは便利である。しかし、それはあくまでも概観であって、より深い追究は今後に残されている。読者は、本書をてがかりにして、より深い追究へといざなわれるであろう。編者の期待も、そこにあったと思われる。

（上・昭和46・5・5、下昭和46・7・5、桜楓社刊、A5判全506ページ、一八六〇円）

（大槻和夫）